



発行
早稲田大学校友会
鹿児島支部

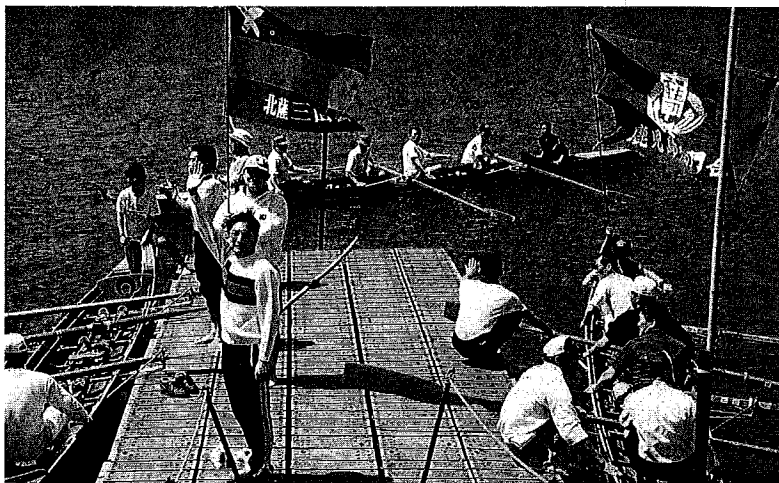
住所
鹿児島市金生町3-1
山形屋本部秘書室
☎0992-27-6310(代)

川内川が燃えた

＝観衆から盛んな声援＝

早レガッタ慶

「五月十六日の川内レガッタの目玉に早慶戦を招待することに決めました。ついては、ご協力をお願いしたい」。川内市漕艇協会の岩崎



▲対抗戦に向かうOBたち。右が稲門会クルー

保会長がこう切りだしたのは、半年前の昨年暮れだったと思う。前夜祭をかねた歓迎会の経費を早慶OBに負担してほしいというのである。

当時、川内市で顔なじみの稲門OBはロータリークラブで知り合った新原晃さんと山根京章さんの

二人。「かくかくしかじか」と二人に連絡したが、三人が自腹を切つて賄える金額ではない。年が明けて、今度は慶応OBからの打診。「北薩三田会を発足させた。早急に早稲田も体制を整えてほしい」と荒木貞夫北薩三田会長からたつての要請である。何はともあれ、川内市周辺在住のOBに呼び掛けて北薩稲門会を発足させ、なんとか資金を捻出しよう。あとは、県内の校友の善意に頼るだけだと、全面的なバックアップに乗り出したのがこの始まりだった。

取り敢えず、十人たらずで北薩稲門会の準備会を発足させたあと、代表が校友会県支部をたずね協力を要請した。大勢の校友の参加の確約も得られた。松元茂会長からはポケット・マネーが届けられ、添え書きに「慶応に負けないよう頑張れ」とあった。こうしてレース前夜、早慶両大学クルーを迎え、川内市内のホテルで稲門・三田合同による盛大な歓迎会を開くところまでこぎつけたのである。

レガッタ当日、驚かされたのは観客数である。レースが近づくにつれ、川内川の堤防沿いは多くの観客で埋まり、主催者発表によると五千人。観客の多くは家族連れで、女性が多いことも目についた。さすが早慶戦ともなるとネーム・バリエーションは違う、としみじみ思ったものである。

大隅稲門会の伊東達夫会長、前



▲川内市内のホテルで開かれた盛大な歓迎会

田通副会長ら大勢のOBが泊まり込み、応援に参加してくれたのは心強かった。トレードマークの角帽とトンガリ帽を被つての応援。早慶OBたちのエールの交換も次第に熱気を帯びてきた。自衛隊音楽隊のプラスバンドが対抗戦の雰囲気盛りあげてくれた。

JR鉄橋下から開戸橋までの干潟で争われた早慶レガッタはスタートからデッドヒート。慶応クルーが一艇身三分の一差でゴールインした。首都圏外では初めての試みであり、川内市民にとって初体験の早慶戦。エキシビジョン・レースとはいえ、なめらかなオールさばき、トップレベルの試合運びに、大観衆から盛んな声援が送られた。

レースに先立って行われたOB対抗レースは早稲田が大勝して、

対抗戦は一勝一敗の五分の引き分けになった。「慶応がOB戦にまけたので、ただ今からビールを無料配布します」。「早稲田クルーが惜敗しました。残念賞として弁当と早慶戦グッズをさしあげます」。このある毎に持ち込んだ飲み物や缶ビール、弁当を観客に無料サービスして、二テタの赤字を残したが、応援団の気分は爽やかだった。

今回の早慶レガッタにあたって、多くの校友のご協力を頂いた。北薩稲門会発足のため、ツテを頼って連絡し合った校友。歓迎会のパーティー券の売りさばき、歓迎会の設営・進行、そしてレガッタ当日の応援。多くの校友の協力がなければスムーズに行くものではない。川内市の広報紙六月号は「川内川が熱く燃えた一日。川内市民はもちろん、両校OBにとって忘れられない一日になりました」と伝えているが、まさにその通りだったと思う。

早慶レガッタをきっかけに、長い間、懸案とされてきた北薩稲門会がとんとん拍子に誕生したし、北薩三田会と事前の交流会も和やかに開かれ、両校OBたちは互いに親睦を深め合うこともできた。近く合同反省会を開こうという話もある。「ひょうたんから駒」とは、こういうことをいうのだろうか。

報告 大武 進

(S33年政経、同35年政研卒)

南日本新聞社川内支社長

今を生きる

南日本新聞社広告局 始良一 徹
(H5年教育学部卒)



社会人になるとともに、あたかもそれらを全て失ってしまったような気もする。

そのような思いが交錯したまま早稲田へと降りたつ。通い慣れた道を歩き、大隈講堂の前に佇む。遠くに大隈銅像が見える。思わず目頭が熱くなった。数カ月前まで自分は早稲田の学生であった。それが今はどうだろう。早稲田を去

った身である。時の流れに逆らい、戻れるものならば戻りたい。胸がいつぱいになる。

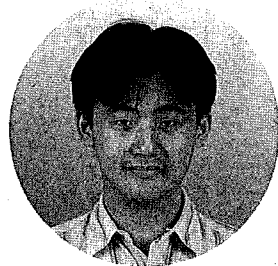
胸にこみあげるものを感じつつ、早稲田の杜を歩いた。するとふと心に鹿兒島が、職場が浮かんだ。鹿兒島も職場も自分で選択したのだ。今、早稲田を、学生生活をなつかしむように、数年後、鹿兒島で社会人として送った生活をなつ

かしめるだろうか。そうなるか否かは自分にかかっている。後悔はしたくない。

過ぎ去った時はもう二度と取り戻せない。だからこそ今を生きる。早稲田の杜にそう教えられた気がする。学籍上は卒業しても、人生においてはまだまだ教えられているようだ。今を生きよう。爽やかな気分が帰路についた。

プロを目指そう

南日本放送ラジオ局
ディレクター 住吉大輔
(H4年法学部卒)



を書けるようになった頃の異動に面喰らったのも、だいたい前の話になった。

現在ラジオ局のディレクターとして、朝の生ワイド番組を週三日、夜の生ワイドを週一日、その他録音構成などいろいろなジャンルの番組を担当している。

いろいろな番組の中で、何がおきるかわからない生放送も楽しいものだが、取材・録音番組は、実際現場に取材に行き、雰囲気まで触れることができるだけにまた楽しい。珍しい地名を発見して「何故こんな地名なんだろう」としばしの推理を楽しむもよし、取材先のオバちゃんに「若いんだからもつと食べなさい」攻撃を受けたり、波音静かな浜辺で老漁師と話をしたりと、人々との触れ合いを楽し

むもよし。
こんな経験を重ねて行くことが自分の仕事であり、また財産となる。幸せな職である。

私は大学受験まで飛行機にも乗ったことがなく、東京・大阪はもちろん福岡にも行ったことがなかった。大都会を知らなかった。それだけに東京での四年間の学生生活は楽しいものだった。夜毎友人と飲み歩き、マネキン人形運びのアルバイト、レンタカーを借りてのドライブ等々。

しかし、その楽しい東京での生活、ほとんど遊んでばかりの生活の一方で、自分の故郷である鹿兒島に対する意識は高まっていったようだ。都心の道路で「鹿兒島」と大書した鹿兒島県経済連の大型トラックを見る度に、大都会のすさまじいまでの吸引力と、それを支えながら農産物自由化のニュウスをきいているであろう農家の人々を思い、青山墓地に大久保利通の墓を発見した時、故郷全てを敵にまわすようなことになりながらも新しい日本の創立に力を尽くした先人の心中を想った。

「故郷は遠くにありて……」
昔、誰かがそう言ったそうだが。東京での四年間の学生生活を通して思ったことを大切に、私は鹿兒島のプロを目指したい。

「今は一体いつなんだろう」。そうつぶやきながら次々と流れゆく車窓の景色をなんとなく眺めていた。大学四年間通った早稲田へと向かう電車に揺られながら、再び学生に戻ったような錯覚を感じていた。

今春大学を卒業し、東京を離れ、故郷鹿兒島へとUターン就職した。社会人として一月がたち、迎えたゴールデンウィーク。気が付くと何かに背中を押されるように再び上京していた。

早稲田大学校友会・鹿兒島県支部総会

小山総長も出席されます。校友の皆様、お誘い合わせの上お気軽にご参加ください。

記

- と き 9月18日(土) 午後5:30~ (総会後懇親会)
- と ころ 山形屋2号館6階山形屋文化ホール
- 会 費 6,000円 (運営費込み)

社会人になって早くも丸二年が過ぎ、私も三年生になった。就職するまで遠い世界の事、自分にはどうして不向きだろうと思っていたマスコミの職に就いて既に二年もの歳月が経ってしまつたという事実は今さらながら驚く。二年前に入社して報道部に仮配属。日々のニュース取材に追われ始める間もなく、4カ月程で異動。ラジオ局のディレクターへ。何とか形だけはニュース原稿らしき物



早稲田回顧

鹿児島市役所納税課 宮原一彦

(H4年法学部卒)



疑問に思うことがある。なぜなら、早稲田という名は、これまで多くの先輩たちの努力によって築き上げられたものであり、反面、自分はこの前卒業したばかりの青二才である。それで、私はこれから早稲田の名に恥じないような人間にならなければならぬし、

また、その名を高めるように努力しなければならぬ。

ところで、最近、早稲田のことが非常につかしく思われて仕方ない。ちょうど東京に住んでいたころ、故郷・鹿児島のことを思うといった様なものであり、そういう意味で自分にとって早稲田は第二の故郷であると思う。そういえば、校歌の第三番に「心のふるさと、我が母校」という歌詞がある。学生のころ、このフレーズを聞いてもピンと来なかったが、

今こうして母校を去り、遠く離れた鹿児島にいとこの意味がしみじみと分かるような気がする。

いま、早稲田はどうなっているのだろうか。また、近いうちにあるの広いキャンパスの中を歩き回ってみたい。ホームシックを治すには、いったん故郷に帰るのが一番の特効薬であるから。本当に早稲田は不思議な魅力をもったところである。

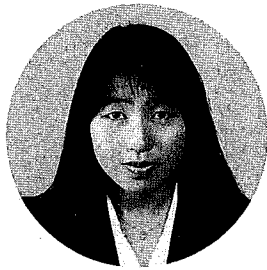
北薩稲門会

会長 新原晃 (S29年・理工) ▽幹事 山根京章 (S39年・商) ▽庶務 飯屋立夫 (S49年・法) ▽事務局
〒895川内市西向田町14
| 23カリヤビル内 電話 0996(23) 2200 F
AX 0996(25) 4650。

私の心のBGM

MBC開発広告事業部 上原真寿美

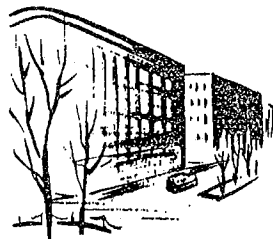
(H4年第一文学部卒)



去る五月十六日、鹿児島県の川内川で早慶レガッタが行われた。

故郷の川べりで早慶の戦いに声援を送り、「都の西北」の大合唱に加わると、早稲田で過ごした四年間が、息苦しいほど懐かしく思い出された。

昨年の三月に大学を卒業。就職を機に鹿児島に帰ってきた。会社



しかし、やはり早稲田ですごした、あの青春の日々がなければ今の私はありません。

男も女も関係なく、ビールをかけた喜んだ六大学野球の優勝。

早慶サッカーを東京ドームで観戦した後、歩いて帰って来て、見上げた大隈講堂の時計盤の灯り。西武線沿線のアパートで、手厳しいが心優しい友人達と語り明かしたいくつもの夜。心のBGMはいつも「都の西北」であった。

早稲田出身の有名人がたくさんいたり、雑誌の受験情報で偏差値上位校に挙げられたり、そういうことがどれほどの自慢になるのかはわからないけれども、卒業生、在校生に愛され、それ以外の人にも広く知られ、親しまれている校歌「都の西北」だけは自慢したくなる。多分、年代によって「青春」の形はちがうのだけれど、早稲田の卒業生は、皆一様に「都の西北」を耳にする度に、熱い想いでそれぞれの「青春」を振り返るのではないだろうか。

生活する場所は変わっても、四年間に培われた早稲田精神は、きつと私の中にも息づいている。あのキャンパスで出会った友人たちと、早稲田ですごした青春の日々が、かけがえない私の財産なのである。

都の西北・早稲田の杜を去ってから、早くも一年と三カ月が過ぎようとしている。五年間も在籍した学生時代を振り返ってみると、さまざまな情景が目に浮かんでくる。入学式で初めて「都の西北」を歌ったときの感動、早慶戦・早明戦の華やかさ、二度も経験したストライキ、そして涙の卒業式。そうしたい思い出を心に残し、早稲田を離れ、私は鹿児島市役所に就職し、納税課に配属された。この課は、仕事上、市民の方々と接する機会が多い職場であるが、時々「どこの大学の出身ですか?」とたずねられることがある。その際、早稲田の名を口に出すと、必ずといっていいほど「あの早稲田ですか」という反応がある。私は、その度ごとに、早稲田は人々に一目おかれているのだなという喜びと同時に、今の自分に「早稲田」を名乗るほどの資格があるのかと

昭和四十六年、サッポロビールに入社した。即、営業に出され新宿営業所に配属になった。担当エリアは神楽坂、早稲田、高田馬場、そして落合に至る地下鉄東西線沿線であった。キャップの補佐として歌舞伎町の歓楽街にもかり出された。

当時、全共闘などの過激派活動家で騒然となった母校の周辺を、そして飲んで遊んだ夜の歌舞伎町を、入社して直ぐ営業廻りするのは予想もしなかった。昼は酒屋さん廻り、夕方からは焼鳥屋、寿司屋からはじまってキャパレーへという毎日の繰り返しであった。



私の仕事は「かごしま人がつくったサッポロビール」

サッポロビール(株)鹿兒島支店長 鳥海 俊和 (S46年法学部卒)

大きな材料があった。サッポロビール創立者に鹿兒島人がいた。明治九年、北海道の大地で国産初のビール醸造所が完成したが、その責任者が村橋久成という旧薩摩藩士であった。これだ。これでいこう。方針は決った。一昨年、村橋久成没後百年を記念して「走る市電ピアホール薩幌館」を運行した。市電の内部を改造し二十四席のピアホールにしたものだ。大変好評で今年で三年目になる。鹿兒島の夏の風物詩と言われるまでになった。「薩幌館」という名称もよかったと思う。

鹿兒島は私の会社生活の中でも特別の意味がある。ここで初めて支店長になった。鹿兒島で何ができるのか。先輩がこれまでできなかったこと、ライバルが決してできないことを支店内で随分論議した。

の女の子にも頭を下げた。何のために早稲田を出たのか。会社を辞めたくなったのは二度や三度ではなかった。それから二十余年、東京、東北そして九州はご当地鹿兒島へとずっと営業畑でやってきた。

鹿兒島とサッポロビールの結びつきを知る人が増えてきた。鹿兒島に来て以来、私の仕事は「かごしま人がつくったサッポロビール」である。もし鹿兒島を離れる日がきたら、その時は部下に「市電ピアホール」で送別会をしてもらおうと思う。

稲門精鋭陣、またも惜敗

第17回早慶対抗ゴルフ大会

大型連休真最中の五月三日、好天に恵まれ、「第十七回早慶対抗ゴルフ大会」が、蒲生カントリークラブで盛大に行われた。

早稲田十一名、慶応十九名と人数的にも不利が予想されたわけであるが、結局今回も勝利の酒を飲むことが出来ず敗退した。

しかし、別紙をみるかぎり個人戦においては馬場弘人氏(S45年教育卒)、岩下吉廣氏(S49年政経卒)などが安定した力をみせており、次回が楽しみな結果となった。



第十二回大会から六連敗を喫し、対戦成績も五勝十二敗となったが、

第十八回大会から必勝を期して望みたい所存である。 幹事 大西 儀朋 (S59年教育学部卒)

開催日：平成5年5月3日

コンペ表

順位	氏名	OUT	IN	GROS	HDCP	NET
1位	馬場 弘人	43	38	81	8.4	72.6
2位	タヌキ アツヤ	43	44	87	14.4	72.6
3位	イワシク ヨシヒロ	40	40	80	6.0	74.0
4位	オオニシ ヨウイチ	46	50	96	20.4	75.6
5位	シバタテ テツヒコ	42	47	89	13.2	75.8
6位	アキバ シゲタカ	39	46	85	8.4	76.6
7位	上原 昌徳	44	46	90	13.2	76.8
7位	ナカエ カズヒロ	39	51	90	13.2	76.8
9位	本 坊 修	46	50	96	19.2	76.8
10位	ウチムラ ジロウ	53	44	97	19.2	77.8
10位	ツキダ ヨシヒロ	48	49	97	19.2	77.8
12位	オドウ トモキ	51	50	101	22.8	78.2
13位	オオニシ ヨシトモ	49	45	94	15.6	78.4
14位	本 坊 吉朗	52	52	104	25.2	78.8
15位	下唐 行雄	47	56	103	24.0	79.0
16位	ヨシダ マホル	46	43	89	9.6	79.4
16位	アラキ サダオ	44	45	89	9.6	79.4
18位	本 坊 浩幸	39	53	92	12.6	80.0
19位	岩 元 恭一	55	47	102	21.6	80.4
20位	ナカオ ナリアキ	51	49	100	19.2	80.8
20位	ミキ タケユキ	53	47	100	19.2	80.8
22位	ダナカ ユキオ	59	53	112	31.2	80.8
23位	ニシノ ヤスヒロ	51	53	104	22.8	81.2
24位	ヤマシタ アキオ	49	52	101	19.2	81.8
25位	スガイ ノリオ	62	52	114	31.2	82.8
26位	キジマ キヨフミ	59	56	115	30.0	85.0
27位	ハマダ コウイチ	54	55	109	22.8	86.2
28位	ヨシノ シウジロウ	59	64	123	36.0	87.0
29位	キジマ カズフミ	68	71	139	36.0	103.0
30位	ヤマダ トシノブ	68	72	140	36.0	104.0

編集後記

場としては是非ご利用いただきたいと思ひます。

会報委員

- 吉田 守 久保 英司
- 辛島 史朗 大西 儀朋
- 岸本 博之

年一回の定時総会だけでなく、校友が気軽に集まれる場ができました。毎月第二水曜日午後六時から、場所は、東千石のアイムビル一階JALプラザ。校友の社交の